

「絶望 45%」に届く言葉を

昨年 11 月 26 日に「新潟の野党共闘と維新」と題してレポートした。それから 2 ヶ月、野党共闘に暗雲がたちこめ、維新は改憲などの動きを強めている。日本ジャーナリスト会議『ジャーナリスト』1 月号に、先のレポートでも紹介した市民連合@新潟共同代表で、新潟情報国際大学教授の佐々木寛さんのインタビューが掲載されている。抜粋して紹介したい。なお、『ジャーナリスト』2 月号「月間マスコミ評」を寄稿する予定だ。

「維新の会を過大にも過小にも評価してはいけない。今回は前回衆院選(2017 年)で希望の党がとった約 1 千万票を、維新の会と国民民主党が分け合った。現状のシステムを維持しながら何とかしてくれと望む『改革保守』の人々の素朴な心理をくすぐった。盤石な支持でなく、一種のご祝儀相場といえる」

「一方で、甘く見てはならない。メディアを取り込み、ワンフレーズで大衆の心理をすくい取る。たとえば『身を切る改革』。自分たちの政治は自己利益のためにしているのではないと訴えた。大阪ではコロナ対策でも経済対策でも客観的には維新の会は結果を出していない。しかし、既存システムに漠然たる違和感を持つ層の支持を吸収している」「だれが政権をとっても世の中は変わらないと政治に絶望し投票に行かなかった層が 45% 近くいる。貧富の差拡大で、不安は募っているのに」

「今の日本は、ファシズムの予兆という点で、第 2 次世界大戦前のドイツに似る。賠償金問題で社会不安が増すなか、国家社会主義ドイツ労働者党(ナチス)が選挙で勝った。名前だけ見れば左翼(革新)政権だ。不安にさいなまれた人たちの大喝采を浴びた。火がつくきっかけがあれば、日本でも同様のことが起こり得る。維新の会の大衆操作政治には油断できない」

「総選挙では与党の自民・公明と野党共闘は各選挙区でがっぷり四つの勝負をした。新潟に限れば野党は 4 勝 2 敗だ。共闘が無かったら、こんな結果は出ない。それを失敗と見るのは科学的な評価ではない。メディアの論調もしかりだ。自分で考える力のある記者が減った気がする」

「今後の野党共闘は従来のやり方を踏襲するだけではだめだ。与野党の枠組みを超えて、永田町(既存の政治体制)そのものを撃つアプローチをしないと、絶望する 45% の人たちに届かない」

「国家主義、ナショナリズムの台頭に手が付けられない事態になる前に、野党共闘の側が『国をどう守り、立て直すか』を提起し、主導権を握ることも重要だ。安全保障、地球の気候危機にも、今後、米国や中国とどう付き合うのかも。対案と、有権者への浸透が欠かせない。新潟の体験から大切と思うのは人間関係の網の目を密に作り上げる地道な努力だ。それがリアルな力を生む」

(2022 年 1 月 28 日)